



べふっ子の共育

～学校だより・つなぐ6月号 巻頭言として～

令和6年6月3日(月)

発行: 摂津市立別府小学校
校長 田中健一郎

こここのところひと月ほど、朝食前に20分間の踏み台昇降を毎日のルーティンとしています。なぜ踏み台昇降か？もちろん健康維持のためですよ。運動です。私もこの年齢ですから健康上気になるところがいくつかあります。定期検診でお医者さんからいつも言われることは「食生活の改善と運動の習慣化を。」わかっているんです。頭ではよくわかっている。しかし、これがなかなか行動にできない。忙しさなどを言い訳にできない理由を正当化してしまう。行動を変えることは本当に難しいと実感しています。

意志は弱いくせに結果だけは求める性分の、その私が続けていることが朝食前の低強度の有酸素運動。Amazonで買った20cmほどの高さのある黒くて四角い台の上に登ったり降りたりすること20分。簡単な動きですが、これはこれで20分も続けていると意外と額にじんわり汗をかいてきて、体がほんのり熱くなります。見た感じの効果はまだ自覚できませんが、それでも自分にとっては望ましい行動が続けられていると朝から気持ちよく過ごすことができます。やらないと気持ちが悪いくらい。これが習慣化か、そしてこの気持ちが「オレもホント毎日頑張っているよなあ」と自分を認められる自己肯定感というものか、とそんな言葉を頭に思い描きながら朝の6時30分を迎えています。

登ったり降りたりの20分をただボーっと過ごすのはもったいないので、スマホのアプリで音声配信を聞きながら取り組んでいます。その話の中で「魔の6月」という話題がありました。この言葉、保護者の皆さんはご存知でしょうか？学級経営を行うときに、6月、11月、2月と一年間に3回の危機があるとされています。これらの月にはクラスが落ち着かなくなったり、問題行動やいじめの認知件数が多くなる傾向があるとされており、そこから「魔の6月」と言われるのだそう。私も長いこと教員をしています、この言葉は知りませんでした。「新学期の4月はどの子もやる気いっぱい、いい自分でいようと張り切っているけど、5月の連休が過ぎたら子どもたちの本当の顔が見えてくる」とか、「運動会が終わったあとは大きな目標を見失ってしまうので日常生活の中で楽しく取り組めることを設定しないと」などといった経験則に基づいた感覚はありましたが、なるほど確かに言葉にすると「魔の6月」なのかもしれないと納得しました。

そして時はもう6月。その視点を持って別府小学校の子どもたちの今の様子を見てみると、確かに変化が見られます。4月には感じられたどこかピンとしたキリッとした緊張感が感じられなくなってきた。自分から時間を守る、休み時間と授業時間の区切りを自分でつけるなどの切り替えが求められる場面や、持ち物を丁寧に並べるとか荷物をきちんと入れるなどの丁寧さが求められる場面がいい加減が見られることも、クラスを見て回っているとよく目にします。

しかし、まあ考えてみればそれも当然のことなのかもしれませんね。新しいクラス新しい人間関係の中で、良い関係を築こうと頑張っていた気持ちや意欲も、数ヶ月経過してみるととだんだんと薄れて慣れに変わります。あれ、何を目指して頑張っていたんだっけ？と目標を見失うこともあるでしょうし、特に自分の能力以上に頑張ろうと張り切っていたことをずっと持続するのはなかなか難しい。私の「健康維持のために運動しなければ」と同じです。モチベーションを再度高めるための新たな目標設定やきっかけが必要になるのだと思います。しかし、大人もそうですが子ども自ら自己を振り返って行動を変えることはこれまたなかなか難しい。それが徐々に自分でできるようにしていくことが教育ではありますが、やはり外部からの働きかけ、つまり周りの大人からの働きかけが必要になるのでしょうか。

では、子どもたちに対して我々大人はどんな働きかけをしたら良いのでしょうか？

やってしまいがちなことは、「時間を守りなさい！」「整理整頓をきなさい！」そして曖昧な注意の代表である「ちゃんとしなさい！きちんとしろ！」と行動に対する注意をすることで無理やり修正させることでしょうか。特に子どもに素直さが見られなかったり反抗的な態度が見られると、こちらもムカッと腹が立ってきて、教師、大人といった威厳を盾にガツンと言ってしまふ。私もよくやりました。仕事でも、そして我が子にも。反省です。しかし、その方法で子どもたちが行動を改めたりできるようになれば良いですが、大概是本質的には変わりませんね。

もちろん場合によっては注意することも必要です。そのままではダメでしょ、放っておいたらダメでしょという場面ではきちんと伝えることも必要。ですが、大切にしたいことは、注意をする大人とその子どもたちとの関係性、信頼関係がきちんとできているかということです。きちんと話を聞いてくれる、本当に自分のことをわかってくれるという実感がある関係性が作れているかどうかということ意識することが必要かと思います。人は自分の話をしっかりと聞いてくれる人のことを信頼します。子どもたちに求めるばかりになっていないか、今できていることを認めて次にどうなったら良いのか、あなたはどうなりたいたいのかにスポットを当てて話ができているか、ということをお我々大人は自己に問いながら子どもたちに働きかけることが大切ではないかと考えます。

今、別府小学校では「キャリア教育」を研究テーマとして全校的に取り組んでいます。「キャリア教育」とは、簡単に言えば、子どもたちの「非認知能力」(基礎的・汎用的能力とも言います)を高めるための教育の仕方。「非認知能力」とは、コミュニケーション能力や感情を制御する能力、自尊感情や自己肯定感、粘り強さと言った社会的情緒的能力のこと。いわゆる人間性とか人間力と言えれば良いでしょうか。

その「非認知能力」を高めるために必要な大人の関わり方として次の6つ。意識して欲しいこととして、4月当初、教職員で確認しました。

- | | |
|-------------------------|---------------------------|
| ① <u>子どもが言うことを否定しない</u> | ④ <u>子どもとのふれあいを積極的に行う</u> |
| ② <u>子どもの話を聞いてあげる</u> | ⑤ <u>能力ではなく、努力を褒める</u> |
| ③ <u>子どもに共感する</u> | ⑥ <u>行動を強制しない</u> |

(参考『「過干渉」をやめたら子どもは伸びる』小学館新書より)

また、子どもたちの「非認知能力」を高めるためのコミュニケーションの方法として「キャリア・カウンセリング」という手法を、研究として教職員が学び、各教科の授業の中で実践しています。ちょうどこの発信を配付する6月3日(月)、追手門学院大学の三川俊樹教授に來校いただいて、この「キャリア・カウンセリング」についてご教授いただくことになっています。

行動を変えるということは難しいことです。特に自分ではない誰か(他人)の行動を変えさせるということは本当に難しい。ですが、自分から変えたい変わりたいと考え決めたことは、行動としていくことができる。そして、それを続けることで習慣化し、やがては自分の能力としていくことができる。そのプロセスの中で、周りの大人がそっと寄り添い、共感し、支援していくことができれば子どもたちは大きく育っていくのではないかと考えます。と、少し難しいことを書きましたが、ご家庭でも上記の6つの関わり方の中で、どれか一つできることからチャレンジしてもらえたら、学校とご家庭とのまさに「べふっこの共育」になりますね。「魔の6月」が「いいね👍再びやる気の6月」にできたら素敵だなー幸せだなーと思います。

さて、今朝も踏み台昇降をしていたら、うちの妻が「ホンマえらいなー毎日続けてて」と言ってくれました。それだけで、もう自己肯定感爆上がりです。果たして妻は「非認知能力」という言葉を知って言ってくれたのか？私の自己肯定感をあげよう意識して言ってくれたのか？それはわかりませんが、ちゃんと見てくれているんだなと大変嬉しくなりました。明日も頑張ります。

うーん、今回は何を書こうかと締切ギリギリまで悩み悩み書きました。

伝えたいことを文章に表すことは本当に難しい！

